

柔道

スペシャルオリンピックス（SO）の柔道公式スポーツルールは、全ての SO 柔道競技において適用される。国際的なスポーツ組織として、SO は国際柔道連盟（IJF）のルール（参照：<http://www.ijf.org/>）を基に、SO 公式スポーツルールを定めた。SO の柔道公式スポーツルールおよびスポーツルール総則第 1 章と矛盾する場合以外は IJF あるいは全日本柔道連盟のルールが採用される。矛盾する場合は、SO の柔道公式スポーツルールが適用される。

環軸椎不安定（亜脱臼）性のダウン症アスリートは原則柔道プログラムに参加することは出来ない。より詳しい情報やこの制限を放棄する手順については、SO スポーツルール第 I 章 総則 補足 F を参照のこと。

参考：スペシャルオリンピックス スポーツルール第 I 章 総則

http://www.son.or.jp/pdf/athlete/program/rule/general_rules.pdf

行動規範、トレーニング基準、医療および安全面の必要条件、ディビジョニング、表彰、上位レベルの競技会への進出条件とユニファイドスポーツを参照してください。

セクション A—公式種目

これらの種目は、広くあらゆる競技能力のアスリートに競技する機会を提供することを目的としている。各国プログラムは提供する種目、および必要に応じて、それら種目の運営方針を決定することができる。コーチは、それぞれのアスリートの技術と興味に応じて、適切なトレーニングの提供と種目を選択することに責任がある。

夏季世界大会においては、1 種目のみ実施される：男女個人種目

セクション B—ディビジョニング

1. SO の柔道競技に参加するアスリートはエントリーフォームに記載する以下の情報により区分される。
 - a. 性別
 - b. 年齢
 - c. 体重
 - d. スキルレベル
 - e. 段級位
2. 各アスリートは、IJF の基準と安全面への配慮に従い、能力や特性の近いアスリートとともに適したディビジョンに分けられる。これはディビジョニングの初めに行われる。詳細は下記参照。

続いてのディビジョニング手順は試合会場で、個人のスキルについて行われる。これによってディビジョニングはより高められる。各アスリートは、コーチからの指示を受けた場合は、それぞれの組において立技と寝技の両方もしくは寝技のみの個人スキルのテストを受けなければならない。(後者の場合、試合中寝技のみで戦うこととなる。)

このテストはトレーニングセッション*を利用して、ディビジョニング委員と畳スーパーバイザーが一緒に行い、プレディビジョニングが適したものであるかどうかを確認する。

※ 訳注：大会時に全アスリートが参加する合同練習会（トレーニングセッション）を開催。練習の様子を見ながら各アスリートのスキルを確認する。

トレーニングセッションでは以下の技を行う。

- ・相手を返してからの抑え込み技
- ・投げ技
- ・投げ技の受身
- ・投げ技の連絡技
- ・返し技

3. スキルは以下の基準により評価される。

- a. 柔道感覚
- b. 競技の概念
- c. 相手の動作の予測
- d. 危険の予測
- e. 原因・結果に対する意識
- f. 技術
- g. できばえ
- h. 技のスピード
- i. 反応
- j. 戦術の理解

スキルレベルは、競技目的ではなくレクリエーションや教育目的で柔道を行っている一般の選手とアスリートを比較して行う。

スキルレベル1：

とても優れた柔道感覚を持っており、上記のような一般の選手と同等に試合形式で戦うことができる。力強い動作と素早い反応ができ、試合中に戦術を組み立てることが出来る。上記の評価基準を最大限に満たしていること。

スキルレベル1のアスリートは競技を行う際、コーチや審判のわずかな補助や誘導を必要とする。

スキルレベル2：

優れた柔道感覚を持っており、一般の選手と同等に乱取りで戦うことができる。多少動作のスピードや力強さに欠けるが、かなり素早い反応ができ戦術を理解できている。上記の基準をよく満たしている。

スキルレベル2のアスリートは試合を進行する際にコーチや審判の多少の補助や誘導を必要とする。

スキルレベル3：

柔道感覚を持っており、一般の選手と楽しむ程度の乱取りをすることが出来る。多少動作にスピードと力強さがあり、やや素早い反応が出来るが、戦術を理解していない。上記の基準をある程度満たしている。

スキルレベル3のアスリートは、試合を進行する際にコーチや審判の本格的な補助や誘導を必要とする。

スキルレベル4：

一般の選手と楽しむ程度の乱取りができるが、彼らの補助を必要とする。少しの柔道感覚を持っているが、素早い動作や反応ができず、戦術を理解していない。上記の基準の低いレベルを満たしている。

スキルレベル4のアスリートは試合を進行する際にコーチや審判の重大な補助や誘導を必要とする。

スキルレベル5：

一般の選手と遊び感覚の乱取りができるが、彼らの本格的な補助を必要とする。柔道感覚はなく受動的であり、試合を進行する際に最大限にコーチや審判の補助や誘導を必要とする。

4. 下記の項目により、さらに細かくディビジョニングされる
- a. 性別 — 男性／女性
 - b. 年齢 — 状況によって、主催者はアスリートのために公平かつ安全である適切な組を作るために、能力（レベルや体重）に基づき年齢基準をさらに細かく分ける権利を有する。
 - c. 体重 — 男子：レベル1～3:<60kg、-66kg、-73kg、-81kg、-90kg、-100kg、+100kg
女子：レベル1～3:<48kg、-52kg、-57kg、-63kg、-70kg、-78kg、+78kg

主催者には責任があり、そのため大会ごとに体重別階級を作る権限も有する。他の要素、つまり能力（レベルや年齢）と組み合わせて競技会参加者にとって公平かつ安全な組をつくる。

第一段階もしくは第二段階のディビジョニングにおいて組に含まれなかったアスリートは、それぞれのコーチや大会主催者の判断によってさらなるディビジョニングを行い判断する。その際は、年齢、体重、能力以前にアスリートの安全を第一に考慮する。

Girls 8 – 11 years	Girls 12 – 15 years	Girls 16 years	Ladies	Boys 8 – 11 years	Boys 12 – 15 years	Boys 16 years	Men
-24 kg				-24 kg			
24-26 kg				24-26 kg			
26-28 kg				26-28 kg			
28-31 kg				28-31 kg	-31 kg		
31-34 kg	-34 kg			31-34 kg	31-34 kg		
34-37 kg	34-37 kg			34-37 kg	34-37 kg		
41-45 kg	37-40 kg	-40 kg		37-41 kg	37-41 kg		
45-50 kg	40-44 kg	40-44 kg		41-45 kg	41-45 kg	-46 kg	
+50 kg	44-48 kg	44-48 kg	-48 kg	45-50 kg	45-50 kg	46-50 kg	
	48-52 kg	48-52 kg	48-52 kg	+50 kg	50-55 kg	50-55 kg	
	52-57 kg	52-57 kg	52-57 kg		55-60 kg	55-60 kg	-55 kg
	57-63 kg	57-63 kg	57-63 kg		60-66 kg	60-66 kg	60-66 kg
	+63 kg	63-70 kg	63-70 kg		66-73 kg	66-73 kg	66-73 kg
		+70 kg	70-78 kg		+73 kg	73-81 kg	73-81 kg
			+78 kg			+81 kg	81-90 kg
							90-100 kg
							+100 kg

セクション C – 競技ルール

1. ルールブックで明確に決められていないが、審判員がアスリートの一人もしくは両者の安全が危ぶまれる状況と判断する場合、審判員はすぐに試合を止めるか、または中断させて必要な対策を取る。これにより審判員は、試合中の行動を考慮し、罰則措置を行う資格がある。
2. 試合時間は3分とし、ゴールデンスコア（延長戦）は1分とする。
3. アスリートが試合場に入るために支援が必要であれば、コーチは審判員（副審）とともにアスリートの支援をすることができる。（注：審判の許可なしには誰も試合場内に入ることはできない。）
4. 試合に参加するにあたっては、“立技（立ち姿勢での開始）”か“寝技（膝立ちまたは座って開始）”のどちらで試合に参加するのかをエントリーフォームに明記すること。
5. 試合を始める際、寝技には2つの姿勢がある。
 - a. 膝立ち姿勢
 - b. 隣り合って座り、手を基本的な“組み方”にし、脚は前に投げ出す。
6. 障害のために寝技から始めなければならないアスリートの場合、対戦相手は通常の立ち姿勢からの開始を寝技から始めること。
7. 安全のため、審判員が立技から始めることを認めない場合、審判員はいつでも寝技から始めることや、立技から寝技から始めることに切り換えることができる。アスリートとコーチは、審判員の決定に従わなければならない。
8. 寝技で開始した試合は、寝技での試合を続けなければならない。
9. 試合が寝技で始まっても、または寝技に切り換えられた場合でも、いつでも寝技から

の投技で得点を得ることが可能である。

10. 寝技試合の場合、対戦相手をまっすぐ後方へ押すことは認めない。
11. 立技、寝技の両方において、審判員は、アスリートの首に負傷を引き起こすような状態でロックされていないことを確認すること。
12. 認められない技は次のとおり。
 - a. 捨身技
 - b. 腕関節技
 - c. 絞技
 - d. 三角技
 - e. 片方の膝、または両膝をついて前方へ投げ出す
 - f. 技をかけた後、相手の上に倒れる。
 - g. 対戦相手の首を危険にさらすような技をかけてはならない。

すなわち

立技での以下の技は禁止とする。

- ・ 腰車
- ・ 首投

寝技での以下の技は禁止とする。

- ・ 本袈裟固
- ・ 枕袈裟固（正式名称：崩袈裟固）
- ・ 肩固
- ・ 縦四方固（片腕のみで抑えられている場合を除く）

さらに、受けの頭部を制御するような技は、取りが片腕で受けの片腕を制御している場合のみ認められる。

13. 柔道着及び帯

- a. ディビジョニングや試合において、アスリートは白い柔道着を着る。
- b. 両アスリートの区別のため、主催者が様々なサイズで用意した赤と白の帯を腰部に締める。試合中、アスリートは他の帯を締めてはならない。
- c. 柔道着は清潔にし、広告やしるしなど何も装飾されていないこと。主催者は、（運営者が許可した場合）必要であれば柔道着の背部の適切な位置にゼッケンを縫い付けさせる。アスリートはそれに従う義務がある。ゼッケンは、ディビジョニングと試合において、簡単に区別できるものでなければならない。
- d. 女性は柔道着の下に無地の白 T シャツを着なければならない。

14. 大会体制

- a. 最終ディビジョニングによって分けられた各階級は最大 8 名の選手から成る。
- b. 同じ階級の選手 5 名まで 1 つの組に分けられ総当たり戦によって戦う。
- c. 同じ階級に 6～8 名の選手がいるときは、A 組と B 組（3 人+3 人、4 人+3 人、4 人+4 人）のように 2 つの組に分けられ、その組の中で総当たり戦によって戦う。2 組での

試合が終わったら、それぞれの上位 2 名が最終ブロックで戦う。最終ブロックは、X パターン (A1vsB2、B1vsA2) により準決勝に進出を決めるエレメンタリーノックアウト形式で行われる。準決勝の勝者は決勝戦に進出する。A 組同士、もしくは B 組同士が決勝であたった場合再度戦い、予選での試合結果に関係なく、決勝戦で勝った方が優勝となる。

- d. 1 つの組の 2 人の選手が引き分け (同じ勝ち点かつ同じポイント) た場合、両者とも 1 位～3 位にふさわしければ、両者の対戦での勝者が上位になる。
- e. 1 つの組の 3 人の選手が引き分け (同じ勝ち点かつ同じポイント) た場合、3 者とも 1 位～3 位にふさわしければ、さらに 3 者で戦うチャンスが与えられる。もし同じことが再度起こった場合の順位は試合当日の会場での体重計量の結果を考慮して決定する。
- f. 選手がその組でのいくつかの試合に出場できないまたは参加を望まない場合、その階級での結果において、その選手のそれまでの結果は考慮されず、その選手自身にもその対戦相手にもカウントされない。

セクション D – 罰則

1. 禁止されている技や動作をした場合、審判員は警告を出して、その禁止されている技や動作について説明をすること。繰り返されると、審判員は罰則を与えなければならない。レベル 1 のアスリートにのみ罰則処置は与えられ、レベル 2 のアスリートは慎重に判断し与えられる。夏季世界大会ではレベル 3 のアスリートにも与えられる。
2. 禁止されている技や動作によって、アスリートが負傷した場合や試合が続けられない場合は、負傷を負ったアスリートの勝ちとする。負傷は、救護担当者によって畳の上で処置され、必要であれば、アスリートのコーチが補助する。
3. 立技で対戦相手の足を掴むもしくは触れた場合、直接反則負けの原因にはならず、指導のみが与えられる。(D.1 参照)

セクション E – 試合場

1. 試合場は、最小で 6m×6m 四方、最大で 10m×10m 四方であること。
2. 安全地帯は試合場の周りを囲み、試合場とは異なる色であること。(最小で 3m 幅)
3. いかなるカメラマンも、試合場から 3m 以内に入ることは認められない。

セクション F – 役員

1. 審判員：3 名
2. 記録係：1 名
3. 時計係：1 名

セクション G – 用具

1 つの試合会場につき

1. スコアボード：1 個
2. 試合用時計：2 個 (電子スコアボードは 1 個のみ必要)

SO 夏季スポーツ公式ルール 2014 年 3 月改定版
柔道

3. 書記の机：1脚、係員の椅子：3脚、組織役員に必要な数の椅子
4. 副審用椅子：2脚
5. 試合者用赤帯と白帯を各1つ
6. 各アスリートのコーチ用の椅子：2脚

<スペシャルオリンピックスのスポーツプログラムを実施するに当たっての留意点>

スペシャルオリンピックスの正式なスポーツプログラムとして活動する場合には、事前に最寄りの地区組織事務局、又はスペシャルオリンピックス日本事務局にご連絡ください。